

修養団体の事例研究

沼田 健哉

目次

1. はじめに
2. J会のアウトライン
 - (1) 現状分析
 - (2) J会の歴史
3. J会の教理
 - (1) ひとのみち教団の教理
 - (2) 倫理研究所とJ会の教理
 - (3) 倫理と宗教
4. J会と現代日本社会

1. はじめに

J会は、最近かつての創価学会を思わせるような熱心な布教活動により、その教勢を伸ばしつつある集団である。昭和51年の12月まで、筆者はJ会の存在をまったく知らなかったが、一婦人が会誌の頒布に筆者の家を訪ずれた事が、研究の契機となった。翌朝、5時からの朝起に参加してみた筆者は、この集団に対し非常な興味と関心をおぼえ、それから一年余にわたる参与観察が継続されてきたのである。しかしこの会に対する理解は現在においてもまだ不十分であり、さらに継続して研究する必要性を感じているのが実状である。したがって当小論も、日本人の精神構造研究の一環であると同時に、J会研究の基礎的部分をなすものとして位置づけられるものである事を、最初にことわっておきたいと思う。

ところでJ会に関しては、2, 3の著書において、わずかに言及されているのみで、J会そのものを正面から研究した業績は、皆無のようである。したがって、創価学会や天理教のような著名な大教団を分析する場合とは異なり、まず会のアウトラインから言及する必要があると思われる。したがって、当小論においては、まずJ会の概要・歴史・組織等にふれ、ついで教義の特性を、他の修養団体・宗教団体との比較を通じて明らかにしていくつもりである。特に、J会は宗教団体ではなく、倫理団体であるというたてまえをとっている所以、宗教と倫理との関連と相違について考察する。ついで、当団体が現代日本社会にもつ社会的意味と位置づけを行なう事にする。これらを通じて、日本人の宗教意識の特質・世俗化・戦後日本社会における意識構造の連続・不連続等の大問題に対する解明の糸口をさぐりたいと思っている。

2. J会のアウトライン

(1) 現状分析

J会は、宗教法人ではなく、文部省許可の社団法人であり、綱領によれば、「生活の改善・道義の高揚及び文化の発展を図るため、生活倫理を実践普及することを会是とする。」「本会は万人の幸福と愛和な家庭づくりに寄与し、もって倫理立国、世界平和の礎たらんことを意図する。従って宗教を説かず主義主張に偏しない。」さらに、「早起きは興国の第一歩」「子供の善導は親の倫理実践から」を二大スローガンとし、「朝の誓5カ条を実践目標とし、もって人格の陶冶と建設的な生活態度・生活倫理の実践を企図する。」

以上が綱領よりみたJ会の内容であるが、朝の誓5カ条とは以下の如きものである。「今日一日、三つの恩を忘れずよろこんで進んで働きます,」「今日一日、人の悪をいわずおのれの善を語りません,」「今日一日、気づいたことは身がるにすぐおこないます。」「今日一日、腹を立てず不足の思いをいたしません。」「今日一日、三つの無駄を排し新しく大地に生き貫きます,」(三つの恩とは、師・親・社会の恩であり、三つの無駄とは、物・時・心の

無駄である。) この5つの誓の内容の分析は後に行なう事にするが、いずれにしるJ会は、宗教団体ではないという主張を強くうち出している。全国にわたっているとされる朝起会場は、360あり、その規模に応じて、支部・支舎・分所・会場に分類されている。朝起会場は1道1都2府33県に存在しているが、小規模で正式に本部の認可会場となるに至っていない準備会場に関しては、その実態は把握できていない。それぞれの公認の会場は、会誌数・朝起参加の人数・会費の納入金額・新入会員の勧誘(倍加運動)による増加数等が基準となって格付けされている。そして公認の朝起会場の分布を検討すると、一つもない県もかなりあり、その教勢はまだかたよっているといえる。多いのは、北陸の石川県・福井県・富山県・長野県・東京・大阪・神奈川県・兵庫県・広島県等であり、北海道、東北・四国・九州地方においては微々たる勢力であるといえる。したがって公称の300万という数字は誇大ではないかと推測される¹⁾。それぞれの朝起会場は班に分れ、さらに班はグループに分れているがその規模は会場毎に相違しており、筆者の地区の会員が所属する会場においては、10人を越えたらグループが分化する事になっており、4～5グループで一つの班を構成している。なお朝起参加人員の8割が女性であるために、グループ長、班長も女性によって占められている。修養団体の中で、モラロジーや、修養団は、男性の方が多いのに対し、J会と、倫理研究所は圧倒的に女性の会員が多いのがその特色の一つとしてあげられる。その理由としては、毎日5時から1時間にわたる朝起会に参加する事は、現代のサラリーマンにとっては非常に困難であるうえに、宏正会の布教活動は会誌の頒布に主としてよっており、これもふつうの男性にとっては時間的には無理なのである。そしてJ会員となっている男性の多くは、妻がまず会員となり、その妻の人格的变化に対する興味と関心により、J会に参加してみても、

1) 当会においては1人の会員に対し、「縁を結ぶ」と称して、夫、親、子、知人等を形式的に入会させ、その分の会費までおさめさせるケースが多い。

会員になったというケースが圧倒的なのである。会員は、年齢と性別により、壮年団・婦人会・青年部・女子青年会に分れているが、30才以上の男子からなる壮年団員は、筆者の所属する地区においては月の第2、第4土曜日の午後7時から9時にいたる2時間の間、土曜集会なるものをひらいている。

ところでJ会で、最も重要視される朝起実践は、毎朝5時より6時にいたる1時間、それぞれの朝起会場で行なわれる。その内容は、まず、最初に「朝の誓」をとえた後に、ほぼ15分間、初代会長もしくは2代目である現会長の著書を読む「御本読み」が行われた後、ほぼ45分間「演談」が行なわれる。「演談」とは、それぞれの会員の体験談であるが、かならず最後に「今日一日何々する事を誓います。」という誓いの言葉によってしめくくられる。一人の持ち時間は3分程度のようなのであるが、日によって多少の違いはある。一日一日が倫理実践の単位とされ、反省と誓いのくりかえしにより、一步一步倫理的向上を目指すのが会員の目標とされる。又、「みそぎ²⁾」と呼ばれる会場のそうじ等に従事する者は、4時までに会場に到着していなければならず、当然の結果として睡眠時間は縮小される事になる。普通の日は、1時間で終るが、日によって、特に日曜日等においては、「今日一日ほがらかにやすらかに喜んで進んで働きます」という結びの誓いの後に、広間座談と称する、会場の長を中心とした話し合いの場がもたれる事がある。ごく日常的な話しが内容であるが、簡単な自己紹介もよく行われる。さらに時々、ゲストを招き、一種の講演と身の上相談がなされることもある。

後にもふれるが、この朝起の実践はJ会において、最も重要視されているが、男性にとって、毎朝参加する事は仕事との関係上困難であり、日曜のみ、もしくは、土曜と日曜のみ朝起を実践する者が多いのが実状である。

J会においては、単に朝起の実践のみでは不十分であり、さらに「無償の奉仕」と呼ばれる、会誌の頒布、もしくは朝起への参加をすすめる「お人誘

2) この言葉の意味する内容はひとのみち教団とほぼ同じである。

い」等を行なう事により、我をとる必要があるとされている。特に、会誌の頒布は重要視され、布教は主として、この頒布によっているために、現会長の著書において、その方法がくわしく展開されており、会員はそれにのっとり、頒布活動を行なっている。会誌の頒布の際、買ってくれた者に対しては、朝起会への参加の勧誘がなされるが、その前にまず座談会への参加が呼びかけられる場合が多い。そこで会長や幹部員等のテープを聞いたり、会員の体験談を聞いたりした後に、朝起会場への参加がすすめられるのである。これは女性の場合であるが、男性は土曜集会等への参加が契機となり、入会したり、朝起へ参加したりするケースがみられる。

以上の如きJ会の実践は、外部の者からみればきわめて厳しく禁欲的であり、常人には耐え難くみえると思われる。事実、J会はそのような厳しさをもっているが、会員は意外と楽しみながら、活動しているといえる。ソフトボール大会・ミカン狩り・お花見等により親睦が深められ、朝起会においても「鏡開き」等も行なわれ、いわゆる「遊び」の要素も取り入れられていて、それまで生活に喜びを見い出せずしていた、家庭の主婦の多くが、むしろ生々とした喜びを見い出せるようになったケースも多い³⁾。

青年団・壮年団における錬成会は、発声練習・マラソン・体操・各種の礼儀作法の訓練等を含み、きわめて厳しいが、女子青年会においては、茶道・華道・書道・礼儀作法・コーラス・歌会など多岐にわたる内容が含まれ、会全体としては柔と剛両面を兼ね備えており、それがJ会が最近教勢を拡大しつつあることの一つの要因をなしているものと思われる。

(2) J会の歴史

ところでJ会について言及するに際しては、簡略にし、その歴史的背景について記す必要がある。当会はその源流を、神道徳光教から派生した戦前の

3) 他の新興宗教団体においても同様であろうが、新しい地区に移住した主婦が当会に入会する事により、初めて地域社会の交友関係に入りこんでいけるという機能は重要と思われる。

大教団、ひとのみち教団に発している。教団は教育勅語をその実践目標とし、天皇崇拜を行なったにもかかわらず、政府の弾圧を受け昭和12年に解体されてしまった⁴⁾。その時、J会の初代会長であるU氏は、解散直前に北陸のひとのみち教団の教師になったばかりだったのである。Uは農家に生れ、旧制中学を中退した学歴の者とされ、解散後、銀行につとめたり、商売をしたりしていた。彼は銀行の預金の勧誘で日本一の成績をあげたという実績を持ち、人の心を把握する生来の才能を有していたのであり⁵⁾、後のJ会の発展に際し、彼のこの種の才能が大きく貢献したものである。このひとのみち教団の直系が現在のPL教団であるが、Uは戦後においては、ひとのみち教団の幹部であった丸山敏雄によって開設された、倫理研究所に関係していたのである。この両者の関係は、両団体の主張がくい違っているので、いまだ十分に解明されていない。というよりむしろ、J会側は、倫理研究所との関連について言及したがらないため、倫理研究所側の資料しか入手し難いというのがより実状に近いといえよう。それによれば、Uは、丸山に師事し、友人を伴って上京しては、丸山にいろいろ指導をうけたようである⁶⁾。丸山はPL教団へ復帰するよう頼まれたが、それを断り、宗教ではなく、倫理を運動のたてまえとする事を方針する決意を明確にしたとされている。丸山は昭和21年、新世文化研究所を創立したが、それは昭和23年社団法人の認可を受け、昭和26年、倫理研究所と改称し、現在に至っている。現在J会・倫理研究所の両社団法人で、重要な布教手段として位置づけられている会誌頒布は、最初上野駅頭などで行なっていた。その後、アメリカのセールスマンのやり方を模倣して、戸別訪問売りするようになったが、Uが自分の銀行につとめていた頃の預金勧誘の体験を語ったりして、やっと愁眉をひらき、この方向に

4) この間の事情に関しては、池田昭編「ひとのみち教団不敬事件関係資料集成」三一書房、1977年がくわしい。

5) 丸山竹秋氏と、当会の幹部会員の言による。

6) 青山一真「丸山敏雄先生の生涯」新世書房 1977年。

進むことが定ったりする場面もあった、とされている。Uと丸山の二人の関係がいかなるものであったかを知る客観的資料を筆者は、もちあわせていない。倫理研究所による資料⁷⁾によれば、両者の決裂は、以下の如くである。それは丸山が死ぬ一年前の昭和25年のある日の事とされる。Uはかねがね北陸に於ける活動ぶりが華々しく伝えられ、丸山も大変信任していたが、いつのまにか丸山と異なった意見をもつようになり、ついに8月7日の夜、所員教育指導の一切を、丸山の手よりことごとく我に委ねられたと要求するにいたった。……丸山は、このUの申出を、静かに、しかしはっきりと、学道の順逆をといてしりぞけた。ここにいつの間にかUの気持が、丸山をはなれていることが明らかになった。……丸山は懸命に師弟の道を説いた。『順』はそれ自体が弟子の唯一道であると共に、その極点が、真の倫理者となる唯一道でもあるからであった。論文『学道』は『倫理者の態度』は、いずれもこの弟子を思う熱涙をふるって書かれたものであった。しかし……ついに悲しむべき別れを見るに至ったのである。かくして又、大きな期待をかけた弟子の一人は、師匠を去ってしまった。

倫理研究所の所員の話しによれば、Uは商人的な才能に富み、人の下にたつのがなにより嫌いな男であったとされる。してみれば両者の分離は、倫理研究所側の立場からすれば最初から必然的なものであったといえよう。

一方、J会の側では、ひとのみちの教師であった事は無論であるが、倫理研究所との関係も隠さないまでも知らせたがらず、その独立性を強調する。戦前のUの思想形成の過程は記されず、Uは諸宗教を研究し、なかでも、黒住教・金光教等の研究に従事し、いくつかの教団に関係したが、その卓越した力量の故に、すぐ幹部に抜てきされかかったとされる。しかし一宗一派にこり固まる事を恐れるが故に、それぞれの教団に長くはいず、すべての宗教と思想を研究した後に、人類史上、空前絶後の快挙ともいえる、J会の教理

7)「同書」

体系を確立するに至ったと主張する。

J会側よりするUの戦後史は以下の如くである。Uは、三菱重工で訓育の仕事をしていて、広島で原爆にあうが、奇跡的に一命をとりとめる。Uは、教員がストライキをするのを見て、このような倫理の頽廃を救うために、焼け跡に立って、辻説法をするに至る。21年5月3日が、J会成立の日とされるが、同年の9月に、すでに、ひとのみちの教師時代の任地である北陸を訪ずれ、小松天満宮において朝起会を始めた。以後は広島より北陸において主として倫理普及運動に従事する。その結果「朝起会場」は、金沢を中心に北陸三県・さらに大阪・京都と進出し、昭和24年には、家族は、東京の吉祥寺に移り、東京での普及運動が開始されるに至る。これらの各地が現在でもJ会の勢力の強い地区となっている。その後会員が3000になった昭和28年に、これを組織して、文部省許可の社団法人とする。35年青年を対象とした会誌を創刊、38年には「新聞」が刊行され、ハワイ・アメリカにも支部、分所が発足する。昭和40年Uは社会教育における功大なりとして、藍綬褒章を贈られる。昭和45年、金沢に青少年育成センターが建設され、47年、九段に本部会館が落成した後に死去し、長男が二代会長となり現在に至っている。

J会の古い会員に対する筆者の質問に対し、彼らは、Uが倫理研究所に関係していた事を否定はしない。そしてUと丸山の関係は、ほぼ対等であり、理論面を丸山が、実践活動の面をUが分担し、それぞれ研究所を指導していたとする⁸⁾。Uの北陸での活動も、研究所側は以下の如く記している⁹⁾。Uの北陸に於ける信望は次第にまして、さながら一つの団体を構成するところまでになっていた。……その勢は志友協議会に反映して当るべからざる勢となり、協議会の空気は次第に緊張の度を加えていた。

Uは倫理研究所の雑誌に時々執筆しており、理論面でも重要な位置を占め

8) 当会の幹部会員の言による。

9) 青山「前掲書」

ていたようである。しかし以上の記述でも明らかなように、研究所側はUを自己の集団の内部の人間とみなす傾向にあるのに対し、当然の事ながら、J会は、独立性を主張する。その事実関係は、歴史的資料によって検討するしかないが、現在の筆者は十分な資料にふれる事ができないでいるのが現状である。

J会員は、現在急激に拡大しつつあるようにみうけられるが、その現代日本社会にもつ意味に関しては、後に分析の対象としたいと思う。その前にJ会の体質を教義の面に焦点をしばって、考察を試みようと思う。

3. J 会 の 教 理

(1) ひとのみち教団の教理

J会の教理は、他の修養団体、宗教団体のそれと比較する事により、その特色が明確になると思われる。特に初代会長がひとのみち教団の教師であったことから、ひとのみちの教理との対比が必要と思われる。又、モラロジー、修養団等との比較もなされるべきであるが、特に倫理研究所との差異が研究の対象として重要である。なぜならば、両団体は、共に、ひとのみち教団より生れた兄弟関係にある修養団体だからである。池田昭は、ひとのみち教団から生じたすべての教団は、その教義内容において、ひとのみちの教義の範囲を抜け出していないと、みなしているが、¹⁰⁾ この見解の妥当性は、実際の資料にあたる事によってのみ検証され得るといえよう。

倫理研究所、J会という、現代日本の代表的修養団体がともにひとのみち教団から生じた事、さらには、直系のPL教団が、きわめて宗教らしからぬ宗教であるとみなされている、¹¹⁾ という事実は重要である。ひとのみちは、日常的道德の実践を強調したのが一つの特色とされる¹²⁾。救済方法としての教

10) 池田昭の言による。

11) YTV情報産業研究グループ編「日本の情報産業2，情報産業としての宗教」サイマル出版会，1975年，38—45頁。

12) 池田「前掲書」

義も、現実生活における実践倫理に終始し、体系化された形而上学的な、宇宙論は存在しなかった。崇拜の対象としては、元霊＝天照大神・皇霊＝歴代天皇の神霊・祖霊＝先祖代々の神霊があったが、それらに対する礼拝ではなく、その時その時における日常生活における心の持ち方をどうするか、というような指導が重要視された。教義は、教育勅語、人訓21ヶ条、元則6ヶ条などの箇条書の処世訓が中心であった。元則は以下の如きものである。(一)かみは万象の根元なり、(二)きみは国土の主権なり、(三)ひとはかみの表現なり、(四)夫はうます力の持主なり、(五)婦はうむ力の持主なり、(六)世はかみわざの実現なり。ついで人訓は、以下の21である。(一)かみは一体であるばんしんなきことを知れ、(二)かみは国のたからである、(三)陛下は国民の親である、(四)親の心はかみの心である、(五)世の中にいきるものの元は皆みずである其の元はひである、(六)天地は一切のものを育て大きくする、(七)世の中は一切のものをかけひでもつ、(八)世の中にあらわれたる一切のものは皆ひとをいかす為にうまれたるものと知れ、(九)宇宙に顯れたる一切のものはみちとしれ、(十)世は鏡ひとは鏡子は鏡である、(十一)ひとは万物の霊長であるひとより尊きものはないことをしれ、(十二)ひとは天性を働かし中間を守れよ(十三)何事も其元を忘れず行へよ、(十四)何事も約束を違へるな、(十五)己を虚くしてひとを尊むべし、(十六)何事も行はぬが故に苦痛となり行へば苦痛とならぬ、(十七)怒り急ぐ憂へ悲しむは物事を崩す、(十八)苦痛は善悪のさかひと知れ、(十九)幸福は己を捨つるにあり、(二十)何事も悟ると共に働かせよ、(二十一)国を尊び家を大切にし身を堅固にせよ。

この21カ条の中、一・五・八・は教祖御木徳一が考えたものであるが、他はすべて、徳一の師金田徳光が言い現わしたものである。「この人訓21ヶ条は大宇宙の原則であって、之を以てすれば宇宙間に説き得られざる問題はないのである。一切の事柄は悉くこの人訓21ヶ条に依って説きあかされるのである。人訓は宇宙間の真理を示されたものであると同時に、世の中に生きてゆく人の生活道を示されたものである。¹³⁾」とされているが、仏教の教理がき

13) 「同書」564頁。

わめて理路整然としているのに対比すると、体系性に乏しく、思いつきの
あるとの印象はぬぐえないと主張する研究者が多い。さらにここには、宇宙
の真理と、人間の生活道は一致すべきという思考パターンがうかがわれる。
この教団においては、かむながらの道が説かれるが、それは人の生きて行く
まことのみちであって、自然なる心の持ち方、さながらなるいきかたをする
生活いいかえれば、自我を捨てた喜びに満ちた生活をいう。人は、このみち
を終始一貫する時、至上の幸福が得られるとされる。金銭に関しては、かみ
は人が金を生かして働かす程度、その人の徳の程度に応じてその人に金を恵
み給う。節約は旨とすべきであるが、使う時には出し惜しみせず、喜んで使
うべきである。又貸借に関しては、人間がまこと一つで働いていれば、金は
自然にかみより恵まれるのであるから、生活に困ることは有り得ない。した
がって、軽率な金の貸借は、神の意志に背くものとされる。職業観は以下の
如くである。人はこの世をよりよくするために、各自独特の使命をもって、
かみより現わされ、生かされている。人はそれぞれの個性を発揮し、自己を
限りなく積極的に表現していくべきである。社会における分業は、かむわざ
の現れであるから、人々は与えられた地位立場に応じて個性を限りなく社会
に表現していったらよい。したがって職業に貴賤の別はなく、その職業によ
りどの程度に自己の個性を表現するかによって、その人の価値が決まる。自
己が与えられる社会的地位・名誉あるいは財産は、その人のまことの実現の
量に対する、かみの公平な適わしい報酬である。したがって、与えられた現
実は当然の結果なのだから、嫌がったり不足に思ったりせず、喜んで働かね
ばならない。

さらに商売人・俸給生活者・労働者・農業家のそれぞれの心構えが説かれ
ている。特に労働者に対しては、不満をいだかぬように説得している。その
論理は以下の如くである。世の中の一切は陰陽でもっている。資本家と労働
者は、ともに必要であり、資本家だけがえらく労働者だけが卑しいのではな
く、両者が目上・目下の関係によって統一されることにより、会社は存続で

きる。資本家と労働者の差異は、祖先もしくは本人のまこと、努力の差異による。したがって、労働者と生れた事を不足に思い、世を不公平と考えることは間違いである。いたずらに待遇改善、賃金値上を要求するのは、義務を忘れて、権利のみ主張することになる。ところがこれこそ大きな誤りなのである。なぜならば、此の世には唯尽くすべき義務があるのみで、人間に権利などないのである。権利は唯神のみに属しているのである。

天候もかみの恩恵により人を生かすべく与えられているのであるから、人はいかなる天候に対してもうらんだりせず、よろこんで順応すべきである。天災は、大自然からの、人間の誤った心もしくは生活に対する警告、すなわちみしらせである。このみしらせの教理は、ひとのみちにおいて重要な位置を占めているが、その強調は、現代の日本における易や手相の流行や欧米のオカルト・ブームより前進的な主張を生ぜしめている。ひとのみちの教理よりすれば、不幸災難は、自己の心の誤りより生じるのであるのに、その事を知らぬ者は、その原因を外的の力又は事象に原因を求め、わかりもせぬ対象物に祈願したり、たよろうとするが、それは迷信である。人は神の分身であり、万物の霊長であるから、一切のものを支配統一する立場にある。日に吉凶はなく、方位家相・厄年や年廻り、丙午もすべて迷信であり、それを憂えることは、ますます不幸を増大させるだけである。ここからは、運命は、自己によってある程度までは、切開かれるという積極的な思考様式がうかがわれる。

前記の如く徳福一致が説かれているが、実際の我々の周囲をみわたせば、そうでない事はすぐわかる。ウェーバーは言う。「ひとそれぞれに《いわれのない》悲しみがおおいとはいえ、それがあまりにもおおすぎた。そのうえ《奴隷の道德》からみてだけではなく、支配層だけがもつ独自の尺度にあわせてはかってみても、もっとも善き者たちではなく、《悪しき奴ばら》ばかりのあまりに華ばなく栄えゆくことが、なんとしてもおおすぎるのであった。」¹⁴⁾と

14) マックス・ウェーバー 安藤英治他訳「世界の大思想Ⅱ—7 ウェーバー宗教社会論集」河出書房 1968年、125頁。

のように、運命と功德とが一致しない理由についての疑問に、合理的で満足すべき回答をあたえている思想体系は、ウェーバーによれば、インドの業の教説、ツァラツストラによる二元論、かくれたる神 *Deus absconditus* の運命予定説、の三つにすぎないとされる。¹⁵⁾ これに対し、ひとのみちにおいては、正しい人が不幸になっているように見え、正しくない人が幸福になっているように思われる現実が世間に沢山ある事は認めている。しかし今までの所謂「道德」は、ひとのみちは人がどうしても踐まねばならぬ生存の法則であり、大自然の法則であるのに対し、そのほんの一部にすぎないとする。大自然の意志は人間によっては把握しきれぬ面があり、一部しか合致しないものをもって、世の中全体を解釈しようとするところに無理が生じる。さらにひとのみちは、人が生きて行く上の幸・不幸を現実決定する大法則をその時その場に説く。即ちひとのみちはその時その場に正しく生きるみちであるとし、いわば場あたり主義的である事を表明している。世に人格者といわれる者でも、心の使い方、生活のしかたを誤ると、不幸不運におちいるとする。すなわちひとのみちにおいては、近代西欧において理念としてとらえられているような、倫理や人格というような概念はなく、きわめて主観主義的な、心の使い方が重要視されている。しかし教団側の論理よりすれば、かみをしらざる道德的判断では真の正しさを知ることはず、ひとのみちこそが生きた真の道德であるとされている。

芸術に対しては、さながらの境地にある時は、立派な芸術品が生れ、心の平静を失っている時は芸術はできず、みしらせの原因を作っている時とみなされる。したがって、芸術の修練により、まことの境地をつかんでゆくことができるかとされている。そしてやや変った芸術の定義がされている。「芸術とは、人が世の爲めに対象（物象・事象）を通じて自己の個性をさながらに

15)「同書」同頁。

表現することである。』¹⁶⁾前記の如く「宇宙に顕れたる一切のものは道としれ」であるから、芸術も娯楽もすべてみちを悟ることに通じる。

J会は、朝起を非常に重視するが、その源流はひとのみちの「朝詣」にある。ひとのみちの朝起観を参照しよう。「人は日と共に起きて働くのが約束である。即ち日が昇らぬ前又は日の出と共に起き出で、日中は働いて夕方日が入ると共に体を休めるのがみちである。朝日が出て後まで寝ていたり、日中横になって寝そべっていたり、夜遅くまで起きているのはみちではない。朝寝をする家は決して栄えぬし、商売人であればその家は繁昌しない。朝寝昼寝夜更しをする人は自然長生きをすることができぬ。朝眼が覚めたら何時と云うことをきかず直ちに起き上る習慣をつけるべきである。それには朝眼がさめたらぐずぐずせずに決然と跳ね起きて、その日すべき仕事を人より一寸でも余計にやるだけの努力が必要である。』¹⁷⁾

みそぎについては、神道本来のものとは異なって把握されている。すなわち、みそぎとは、一身を犠牲にして世の為人の為に働くこととされている。はたらくことは、はたをらくにすることであるという語路合わせがなされ、人は肉体を使用すればする程かみより生かされているという目的にかなない健康になる。しかしみそぎは、真に己を捨てたよろこびの働きでなくてはならず、単に体を動かせばいいというものではない。己をすてて国家のために働くところに真のみそぎの精神がある。

家庭生活に関しては、まず祖孫一心という事が説かれる。祖孫一心とは、先祖と子孫の心は一つであり、切離すことができないということであり、先祖のもった心はかならず子孫にあらわれるとされる。先祖がもっていたものは、好いものにつけ悪いものにつけ、リレー競争と同様に、子孫にうけつが

16) 池田「前掲書」582頁、この論理からPL教団の「人生は芸術である」という教理が生じてくるのである。

17) 同書583頁。

れていく。したがって我々のなすべき事は、先祖の心ないし行為のよい面を伸し、足らざる面を匡正しまことをつくし、子孫に残すことなのである。家と両親に対しては感謝報恩の念が説かれ、親孝行は当然の義務とされる。子は親に絶対服従することがみちなのであるから、服従しない者は、徳福一致の教理よりしても当然不幸になる。それに対し、孝行な者は必ず成功する。

その他、家の相続・夫婦の縁・恋愛・結婚・妊娠と出産・育児、嫁姑、みだしなみ、料理、さらにはたべもののたべ方にいたるまでの、きめこまかい指導がなされている。

以上がひとのみち教団の教理の概略であるが、J会における朝起の重要性の強調の先駆となった、朝詣に関しては、その精神と内容にわたる明確な規定がされている。それによれば、まず人は日出と共に働き始め、日没と共に休息するのがみちであるが、さらに朝詣の積極的意義として、実行力の修練があげられる。ひとのみちでは、意志を強固にする修練はまず朝起から始める。朝詣の場は、教えの内容をそしゃくして、日常生活に同化する訓練がなされる場、すなわち、教信徒の心の洗濯場・行の修練道場として位置づけられている。¹⁸⁾ 朝詣奨励法も記されているが、その中にある朝詣奨励標語の一例「朝起一つ出来ぬようなことで何が出来ようか。」¹⁹⁾は、ほぼそれと同じ標語でJ会において用いられているものである。

(2) 倫理研究所とJ会の教理

J会の教理の主たる構成要素は、前記のひとのみちの教理にほぼ含まれているとって過言ではない。しかし、ひとのみち教団・さらにその直系のPL教団は、宗教団体であるのに対し、倫理研究所・J会は、社団法人であり宗教団体でない事を強調している。このことは何を意味しているかは、重要ではあるが解明が困難な研究課題と筆者には思われる。

18) 「同書」590—591頁

19) 「同書」591頁。

歴史的脈絡の中で考察するならば、ひとのみち教団は、天皇制に積極的に協力しつつ弾圧されたという体験を有している。天皇制自体が一種の新興宗教といえる面を多く有しており、他の新興宗教団体とは、いわば競合関係にあったといえる。²⁰⁾この体験は、未来に対する予測も展望も持ち得ない、終戦直後の状況において、ひとのみちの本体も、宗教でいこうか、倫理団体というたて前をとろうか迷った結果、現在のPL教団のような形態をとるにいたったとされる。特に政教分離が強調されたのであるから、宗教団体でないとした方が、種々の面でメリットを持ち得る可能性があるように予測されたであろうし、さらにひとのみち教団自体が、日常道徳の実践を強調する教団であった事が、倫理研究所・J会の如き修養団体が発生し得る土壌を提供した事もたしかである。

日常道徳は、ひとのみちや、倫理研究所が初めてではなく、日本においては、古来から、多くの集団において説かれてきたものであった。しかし、倫理研究所やJ会の教理が、まったく新しいものを含んでいないと断言するのは、ややけいそつに過ぎる可能性があると思われる。それで以下において、両社団法人の説くところを、J会に重点をおきつつ検討していくことにする。

倫理研究所は「倫理の研究並びに実践普及により、生活の改善・道義の昂揚・文化の発展を図り、もって民族の繁栄と、人類の平和に資するを目的とする。」²¹⁾として、以下の信条を実践の目標としている。一、我等は、喜んで苦難に当り、進んで己の本分を完くいたします。二、我等は、一宗一派に執せぬ高き信仰と、道義の実践とを、生活の両翼といたします。三、我等は和やかな家庭をつくることを実行の第一歩といたします。四、我等は、日本文化の本質を明かにし、世界の文化を摂取して、生活の向上に努めます。五、

20) 高木宏夫「日本の新興宗教」岩波書店 1964年。

21) 社団法人、倫理研究所「会員手帳」2頁。

我等は人を愛して争わず、世界の平和に貢献いたします。

J会の綱領についてはすでに記したが、J会は、「生活の改善・道義の昂揚及び文化の発展を図るため、生活倫理を、実践することを宏めると共に、これを各人の生活に融合せしめ、人生の苦悶を解脱し、人と争わず、家庭を明朗化し、各々の業務に精励せしめ、人類永遠の平和を目標に、祖国の再建に資するを目的とする。」どちらも綱領においても類似しているが、宗教に関する点を比較すると、倫理研究所が「一宗一派に執せぬ高き信仰と、道義の実践」と言っているのに対し、J会は、「宗教を説かず主義主張に偏しない。」としており、この両者の差異は、そのまま両法人の性格の差異に結びついている。即ち、J会の方が、普通の意味での宗教性がより希薄なのである。

丸山は、以下の17条をあげている。一、今日は最良の一日、今は無二の好機、二、苦難は幸福の門 三、運命は自らまねき、境遇は自ら造る。四、人は鏡、万象はわが師、五、夫婦は一对の反射鏡 六、子は親の心を実演する名優である。七、肉体は精神の象徴・病気は生活の赤信号、八、明朗は健康の父・愛和は幸福の母、九、約束を違えれば、己の幸を捨て、他人の福を奪う。十、働きは最上の喜び。十一、物はこれを生かす人に集まる。十二、得るは、捨つるにあり。十三、本を忘れず、末を乱さず、十四、希望は心の太陽である。十五、信ずれば成り、憂えれば崩れる。十六、己れを尊び人に及ぼす。十七、人生は神の演劇、その主役は己れ自身である。²²⁾以上の項目がひとのみちの処生訓の多大な影響を受けているのは、一目瞭然である。

丸山敏雄は、自己が提唱する徳福一致の絶対倫理は、いつ、どこで、誰が行なっても、常に正しく、皆幸福になる道であり、それは、明朗(ほがらか)・愛和(なかよく)・喜働(よろこんではたらく)の三つであり、より集約

22) 丸山敏雄「万人幸福の栞」新世書房1977年、目次。

すると、純情（すなお）になるとする。²³⁾

大自然は、宇宙の法則により、常に規則正しく動いており、他の動物はすべて、自由、平等である。人間社会においてのみ、貧富・貴賤・上下・健康虚弱・賢愚の差があるのは、人間のみが、勝手気まま、わがままができるからである。苦難は、このわがままをする事によって生じるのであり、それを取り去り、正しい生活にもどれば、苦難はなくなる。したがって、人生の苦難とは、自然なルールからはずれたと注意してくれる赤信号であり、幸福の道に立ちかえらせるためのむちである。したがって、人は病気を歓迎し、苦しみをたたえるべきである。²⁴⁾

丸山敏雄は、これまで修身で教えられてきた道徳は、旧道徳とでもいうべきもので、意味がわかりにくく、実生活に間にあわないとみなしている。さらに、最も重大な欠点として、徳福不一致をあげる。旧道徳の徳目は、高い峰のようで、そこまで達する事ができる者は少い。これに対し、丸山は、自己の提唱する道徳は、新道徳であり、だれがみてもはっきりしており、行い易く、守り易く、しかもそれにはずれると損をしたり病気をしたりして、すぐ生活にひびいてくるものと主張する。旧道徳は、一々の心使い、心の中で思うことにはふれず、上すべりしていた。²⁵⁾

これらの丸山の主張は、ようするに心の持ち方しだいですべては変り得るという、はなはだ主観性・観念性の強い見解であるといえる。それは、従来の道徳と比較して優劣を問題にすべき種類のものでなく、むしろジャンルの相違として扱うべきものと思われる。

病気は、心の用い方しだいで、かかりもするし、なおりもするという教理は、日本の新興宗教の多く、たとえば、天理教・生長の家等にみられるもの

23) 「同書」9頁。

24) 「同書」11—14頁。

25) 「同書」123頁—133頁。

であり、なんら新しいものではない。最近の心療内科等の存在をもって、新興宗教の教団の多くは、教義の科学性を主張する根拠とするが、両者は大きく相違しているのである。心療内科は、従来の肉体偏重の医学の弊を改めようとしているが、新興宗教のような心理偏重におち入る事も強くいましめているのである。²⁶⁾ もちろん諸新興宗教団体も、しだいに、病院を創設したりして、医学と正面から対立するような主張は、はっきりとださなくなる傾向にあるが、倫理研究所は、モラロジー、J会に比較すると、だしているかにみえる。²⁷⁾

以上、ひとのみち教団、倫理研究所の教理の概要を検討したが、J会の教理は、この両者と類似点が多い。時に、倫理研究所との類似は、丸山竹秋氏の言によれば「同じウイスキーであれば、ウイスキー同志似ているのは当然であり、違いはサントリーとニッカの違いのようなもの。」とされる。双方とも、ひとのみちの教師によって始められた修養団体で、社団法人という形態・さらには布教が主として会誌の頒布によっている点まで同じである。いずれも朝起を重要視している点も同様であり、これは、ひとのみちの「朝詣」の伝統をつぐものであるが、直系のPL教団が、昭和40年以降、朝起を一部を除いて中止してしまったのと相違している。PLが中止した理由は、テレビの普及等のために、時間帯が深夜にずれてきた事により、朝起が困難になったためとされる。事実、倫理研究所・J会の男子会員が少いのも、同じ理由によると思われるが、ひとのみちの最も禁欲的修養の面を、うけついでいるのがJ会であるといえよう。これは、PLが世間には「ゴルフとダンスと日本一の花火」というイメージで受けとめられているのと大きく相違している。

J会については、多くの検討すべき現象があるが、その前に、教理に対す

26) 池見西次郎「心療内科」中央公論社、1977年。

27) 倫理研究所編「健康と倫理」新世書房1977年。

る概略的考察がなされねばならない。²⁸⁾ J会はその目的を、動かし難い大自然の法則にそって確立した。生活のすじ道を、会員に教え実践する事にあるとする。祖孫一心が説かれ、祖先からは、肉体・精神の外に、社会的名誉や財産もひきつがれ、貧富の差は一見不公平にみえるが、伝承の重みを理解すれば、正しい自然のすがたである事がわかるとされる。しかしながら、自分の努力によって自己を変える余地はあるとされ、祖先から受けついだ悪い点は祖先に代って心から反省し、それを自分の代で断ち切り、良い点は伸ばすように努力する。それによって、子や孫に良い遺産を受けつがせる道がひらかれる。それは、リレー競争と同じ原理によっている。

社会という共同体においては「和」することが大切であるが、その最初の基盤は家庭にある。夫婦関係は、夫と妻がそれぞれの役割分担を明確にしたうえで、それぞれの本性を発揮すべきである。そして、J会は、たてまえとしては、夫婦は平等であり、主人は機関車であり、妻は客車に比すべきものであるから、主人が先にたつのは当然であるが、それは、夫婦の働きに価値の上下がある事を意味しない。この夫婦の和から一家の幸福や社会全体の和も可能になるとする。争う心をなくする事がなにより大切なのである。

常に一步退いて自分を冷静に見つめ、物事に当っては、他を批難批判することなしに、自分が悪いのだという気持で、すべてをひき受ける心がまえの必要性が説かれる。「純情」つまり「すなおさ」は大切であり、本来人間にそなわっているのだが、我をはる、わがままな心を持つ事により、そのよい性質が現われないでいるだけなのである。

「我境一体」とは、人の一生は宿命的に決ってしまうものではなく、その時、その場の心の用い方により、変り得る、すなわち、自己の運命は自分の

28) 以下の論述は、主として、二代目会長の著書によっている。その内容は、初代会長と比較すると、戦後社会に対応しやすい方向への変容が感じられる。しかし、実際の会員に対する指導においては、大きな変化はないと言える。

力で開拓できるという事を意味するとされる。しかしそれは、対象をまず変えようとするのではなく、この世のすべてをそのまま受け入れて、「現実大肯定」をし、これがいいのだと認めればいいとされる。心のあり方は、周囲の人たちに影響し、それによりその人の望む方向に動いていくし、「物心一如」といって、物質的なものでさえ、こちらの心構えによって、集合離散する。これらの主張はJ会の教理が、かなり純粋な主観的観念論である事を示している。

心と身体の関係についていえば、病気をとおしてみる事が有効とされる。病気は、まちがった心、誤った生活の現われであるから、いわば赤信号である。この見解は、日本の新興宗教の多くにみられる教理であるが、J会のそれは、ひとのみち・倫理研究所に比較するならば、より合理化がなされ、超自然的要素がうすれている。その受けとめ方は、会員によって異なるが、医学を否定するような事は、現在においてはまずないといっている。たしかに心の持ち方によって治る病気もあるし、治らぬ病気もあるであろうが、その事自体は、宗教社会学の扱うべき対象ではなく、ある信念を信者が持つ事によって、その人間がいかなる行動をとり、それがいかなる影響を社会に与えていくかが分析の対象であるといえる。そのような視点からするならば、この教理は、病気という体験を自己の心と行動の反省のきっかけとする事により、一層の修養を積ませるという機能を果しているといえる。

倫理とは、大自然を動かす理法のうち、人の世界を支配する絶対生活律とされ、人である以上は、それなしでは一日も満足に生きていけず、すべてを包括し、全世界をおおう絶対的な道にはかならない。不幸は、そのすじみちを忘れる事から生じる。この世のあらゆる事象は、大自然の御心のあらわれであり、人間は、すなおに、ありのままを喜んで受け入れればよい。水が方円の器に従うように、自分の気持ちをたたえれば、それは「まこと」であり、上に対しては「敬」、下に対しては「愛」が持つべき心の働きである。人は、このようなすなおさにめざめるには、まず父母に対して孝行をつくすべきで

ある。

又「気づき」の生活という事がいわれるが、それは直感的なひらめきあるいは、勘・第六感といわれるもので、程度の差こそあれ、だれでもが経験している現象である。しかし、多くの人は、せっかくのこの気づきをやり過ぎてしまうことにより、実行するせっかくのチャンスをのがしてしまうのである。したがって、ふだんから気づいたことは、みがるにすぐ行なうという習慣をつけておく必要がある。良い「気づき」は、実行力がある人に多く恵まれるが、それを得るためには、わがままな心・つまり「我」を捨てねばならない。「気づき」とは、靈感であるが、靈感を働かすには、心を清く美しく保つ必要があり、それには、朝起の実践による努力と熟練が必要とされる。それにより、不動の信念と、不屈の精神が養われ、それが健康と幸福につながるとされている。

J会では、一日一日を区切りとしているが、この「今日一日主義」こそ、仕事の能率と成績をあげるうえで、重要なものとして位置づけられる。「時の無駄」をなくすると共に、怒る、憂える、急ぐ、悲しむ、などの「心の無駄」をなくさなければならない。それを実践するには、「その時その場の心に生きる」事が必須である。一瞬一瞬に全生命を打ち込み、緊張を失わず、力の限り有意義に過ごすべきなのである。

我々は自然によって生まれてき、生かされているわけであるが、自然から与えられるものは、すべてただであり、「無償の恵み」である。このように無限に与え続ける自然に対し、人間はいかに感謝しても感謝しつくせないわけである。この自然に対する感謝が、人に向った場合に「親切」となり、社会的に現われたとき「奉仕」となる。人間は一人では無力であり、大自然の偉大な力により生かされ、多くの人の恩愛のなかで生かされている。人間は自然から授かった恩を返す事は不可能であるから、せめて社会から受けた恩は社会に返すべきであり、それが「奉仕」であるがそれは無償であるべきなのである。「発願還元の理」とは、物事は、与えれば与えられ、捧げればい

ただくという事で、利己的な行為からは、人間の幸せは生じてこないのである。なにごとに感謝の心を持つ事が大切であり、そのくり返しによって、倫理にそった人格の完成に近づける。この大自然の恵みに対する感謝という教理は、新興宗教に限らず、日本の庶民信仰に共通するものであり、J会に固有のものではまったくない。PHPにおける松下幸之助の考えもほぼ同様であり、²⁹⁾ これはある意味では、人格的超越神のない風土において生じやすい、普遍的思考様式であるといえる。³⁰⁾

人はそれぞれの職業を持って働いているが、職業に貴賤の別はない。どんな職業についているにしろ、喜んで、まことをつくして働くことが大切である。これを「喜働」と呼ぶが、そうすれば、病気にかかるなどの不幸はなく人間は豊かに幸福になれ、「徳福一致」が実現する。

天地自然の法則にかなった夫婦道は、働きかける夫の力と、この働きかけを受けて実らせる妻の力が合一したとき実現される。理想的な夫婦になるための基本的な心得としては、以下のものがあげられる。一、夫婦は、深く愛し合うこと。二、お互に不足を思わず、小言をいわないこと。三、相手の領分に干渉しないこと、四、どこまでも親切をつくすこと、五、親しき仲にも礼儀を正すこと、これらを守り、夫婦愛和の生活を実践することが、子供の教育にも好影響を与える。しかし、家庭が不和とならないためには、嫁としゅうとめの関係がうまく行く必要がある。その際、嫁は我をはる事なく、しゅうとめの気持になって、奉仕する心にならねばならない。

J会に入る主婦は、しゅうとめとの関係と共に、子供の教育上の悩みによって入るケースが多いのであるが、J会の教えでは、12・3才までは子供の自我意識はないのだから、悪い芽があるとすれば、以下のいずれかにその原因があるとする。それは、一、過去における祖先の誤った生活の伝承、二、

29) 俵孝太郎「PHPの世界」日本能率協会1970年。

30) 森三樹三郎「神なき時代」講談社、1976年。

両親の過去、もしくは現在の誤った生活の反映、三、環境からの影響である。「子は親の鏡」であり、「子は親の心を実演する名優」であるから、子供の行動は、両親の過去や現在における行動や心を実演しているわけであり、親は、子供の悪い行いをみるにつけ、自己の生活を改め、倫理の実践に励まなければならない。又、子供の教育は「捨て育て」が根本であり、よけいな心配・恐れ・心づかいをせず、なるべく自然のままの姿におくべきである。教育の根底は「信頼の心」であるが、子供が、敬愛するような親でなくては、よい教育は行ない得ないといえる。親孝行の大切さは、親が老人をいたわり先祖のみたまを、朝夕拝んだりして、手本を示す事によって子供に伝える事ができる。親夫婦が円満に暮らしていれば、子供もすなおないい子に育っていく。したがって親が自己の生活を正す事が、まず子供の教育の前提であるとされる。

このように、J会では、多くの生活のすじみち、倫理を説いているが、それは実践する事によって効果が期待できる。筆者のように、倫理は研究する事によってわかるものではなく、実践する事によってのみ、そのすばらしさが実感されると主張している。³¹⁾ そのためには、まず朝起が必要であり、「早起きは、生活倫理の第一歩」「早起きひとつできない者に何事ができようか」「自己完成は、まず早起きから」「早起きは、幸福をもたらす第一歩」という標語が、その重要性を示している。J会では、「終始一貫」した実践を強調し、「三つのカンコウ」と教えている。それは、「敢行」「貫行」「慣行」の三つで、「敢えて行ない、貫き行ない、慣れ行なえ」ということである。毎朝自己暗示をくりかえす事により、しだいに倫理実践者となる事が可能なのである。

以上が、二代目会長の著書を中心としたJ会の教理の概要であるが、その構成要素においては、独自のものは無いといっていいであろう。しかしそれ

31) 筆者は、会員にくりかえし、くりかえし、この事を言われた。

は、J会が、ひとのみち、倫理研究所と異なった教理をもたず、個性の欠如した集団である事をは意味しない。J会の教えは、以下の五つの朝の誓いに集約される。「今日一日、三つの恩を忘れず、喜んで進んではたります。」
「今日一日、人の悪をいわず、己の善を語りません。」「今日一日、気づいたことは、身がるにすぐ行ないます。」「今日一日、腹を立てず、不足の思いをいたしません。」「今日一日、三つの無駄を排し、新しく大地に生きぬきます。」これは、初代会長の言によれば、仏典のエキスであり、内容の要約であるとされている。筆者は、これらは基本的に日常道德のレベルを越えるものではないとみなしているが、このように、たった五つに行動原理を要約した事は、J会の成功の一因をなしているといえよう。それには、モラロジーが法学博士によって、倫理研究所が大学卒のインテリである丸山敏雄によって提唱されたのに対し、J会の初代会長がより、ノンエリートの独学者であった事がむしろ幸いしたと思われる。又、倫理研究所は、研究所という名が示すように、研究員を抱え、多くの著書を出版したりしているが、J会は、布教をその主たる目標としている。さらに、両創始者の性格資質の差異によると思われるが、倫理研究所が、「芸術によって生活を浄化し、各人の個性を伸し、もって優雅な人生の妙味を体得するために」³²⁾「秋津書道会」と「しきなみ短歌会」を組織しているが、J会においては、会全体としては、そのような活動は行なっていない。この点からみても、倫理研究所の方が、PL教団ほどではないが、芸術をとおして、みちを求め実現していくという指向性が強いといえる。さらに、丸山は、「純粹倫理原論」、「実験倫理学大系」等の著作を試み、科学としての倫理学の体系をうち立てようとした。それはまだ学問的な形式をもつまでにいたらなかったのであるが、J会の会長には、そのような指向性そのものが欠如していたと思われる。今まで、両集団の教理をごく概略的に検討してきたが、ついで、「倫理と宗教」というテーマにし

32) 社団法人倫理研究所編「会員手帳」12頁。

ばって、両法人の教理を分析の対象とする。これは、筆者にとって、もっとも難解かつ重要な問題に思えたからである。

(3) 倫理と宗教

倫理研究所とJ会は、いずれも宗教法人ではなく、社団法人という形態をとっている。しかしながら興味深いのは、モラロジー・修養団においても同様であるが、いずれの開祖も宗教を否定せず、それどころか、宗教の熱心な信者であったという体験を有しているのである。特にJ会の初代会長の場合は、資料が十分でないので断定的な事は言えないが、丸山敏雄は、はっきりとした太陽崇拝者であり、天皇崇拝者であったし、³³⁾ 二代目会長の丸山秋氏も同様である。又、両法人の初代会長のいずれもが、「身代り」「おふりかえ」を行っていた事を、筆者は会員の言から確認している。彼らは宗教を否定するどころか、むしろ信仰を持つ事を奨励しているのである。又、両法人のいずれにおいても祖先崇拝が説かれており、その点では、日本宗教の普遍的パターンの中に内包されているといえる。しかしながら、両法人のいずれにおいても、キリスト教、天理教・立正佼成会等の創価学会員を除く信者が含まれており、この点ではやはり、宗教集団とみなす事は困難であるといえる。しかし丸山竹秋の言によれば、倫理研究所がめざしているのは、かんながらの道であり、古代における原始神道の理想とした思想なり、生活態度であるとされるし、J会の初代会長も、それに類した思考を有していたと筆者は推測しているのである。そうするならば、この問題は、かって論争となった「神道は宗教か否か」という問題のむしかえしとなる可能性を有しているといえる。

高木宏夫は、モラロジー（道德科学研究所）と倫理研究所を、新興宗教のもっとも新しい形態として把握している。彼によれば「新興宗教の教団が学会と称し、さらに研究所と名のるものがあらわれたことは、時代の変化に即

33) 丸山竹秋「倫理と宗教」新世書房、1975年。

応して科学的衣裳をつけ、宗教的雰囲気をつつみかくそうとする傾向を示すもの」³⁴⁾とされる。しかし単に、宗教であるか否かという論争は、宗教をどう定義するかでどちらの結論を出す事も可能であるから、あまり意味がないと思われる。これに比較するならば、西山茂の見解は、新しい提言を含んだものといえる。氏は「現代宗教における擬似宗教性」という題目による発表において、³⁵⁾ 純宗教の本質的定義要素として、「超自然性」と「究極性」をあげた。すなわち、超自然的かつ究極的な性格を有する信念と実践の体系を有するものが純宗教と呼ばれ得るものとされる。そして「超自然性」とは非経験的な存在（神・仏・霊・天国・地獄等）に関する信念と、それらに関連した実践（祈願・礼拝等）を意味し、「究極性」とは、自己存在および世界存在そのものの存立根拠と、それらの至高の理想態に関する信念と、それらに関連した無限定的実践を意味している。氏はさらに、超自然性と究極性の減退に対応して、純宗教は擬似宗教となり、ついで非宗教となるとする。擬似宗教は、準宗教と仮性宗教に区分されるが、究極的だが非超自然的な、道徳的擬似宗教として、氏は、モラロジー・J会・倫理研究所・修養団・MRA・PHP等をあげ、それを実践的倫理運動をもって、その抽象的特定としている。この理論枠組は、問題点を明確化し、整理するうえで有効であるし多くの示唆に富むものであるが、J会や倫理研究所を観察した結果からすると、究極的だが非超自然的であるのは、タテマエで、実際には、かなり超自然的要素があり、それが会員に対しておよぼす影響には、微妙なものがあるといえる。たとえば、以下のような実例がある。倫理研究所の一人会員がやけどをした瞬間に現所長である丸山竹秋氏の事を思った。するとちょうど同じ時に、丸山は熱い茶の入った茶碗をひっくりかえし、足にかけた。その結果として、婦人会員はやけどらしいやけどもせず、すぐ回復した。³⁶⁾一方、

34) 高木宏夫「日本の新興宗教」岩波書店、1964年。81～82頁。

35) 宗教社会学会研究会1977年度夏期合宿における発表、以下レジメによる。

36) 丸山竹秋の言による。

J会側の例としては以下の如きものがある。朝起会場の分所長である一婦人は、かぜをひいて熱があったが、朝起に参加する前後と、会場での一時間においては、熱が下った。そして、現会長に、みじかに接する機会があった時に、熱がすうっと、会長に吸い取られるような気がしてそれ以後熱が下り、かぜが直ってしまった。このいずれも、現代における「おふりかえ」もしくは「身代り」³⁷⁾といえないであろうか。両法人において、超空間反射という事が説かれ、いくら遠方に離れていても、Aの心のもち方がBに影響を与えたとされており、親が自己を反省したら、遠方の不良息子が心を入れかえて帰ってきた等の例が述べられているが、倫理研究所の例も、その一つといえる。又、J会における私の体験でも、会に貢献したり、実践に励めば、かならずいい事があると、普通の新興宗教団体と類似した現世利益が説かれる場合が多いのである。

ところで、両法人においては、宗教と倫理との関係をいかに位置づけているかを検討したいと思う。まず倫理研究所の丸山敏雄は、倫理と宗教の差異を以下のように述べている。「倫理は人と人、人と物との関係・宗教は人と神との関係を律する。しかし宗教は、倫理の上に足をふみしめており、道徳をその衣として上に着ているが、その本質は、善悪をはるかに越え、実は実践などは問題にならぬ。ただ『信』によるもの。」³⁸⁾「宗教はあくまで『信仰』を主とするに反して、倫理は実行を中心とする。」³⁹⁾「宗教は人と神との関係をはっきりさせる。言いかえると、人の神性（人の中にある神の性質）を引き出すもので、上下に働くものであるが、倫理は人と人との関係・人間相互の暮し道をはっきりし、物と人との横の関係を正しくして、あくまで人としての本性をのばして行こうとするのである。宗教には教祖があり、神話伝説

37) この現象に関しては、池田「前掲書」参照のこと。

38) 丸山敏雄「歓喜の人生」新世書房、1977年、211～212頁。

39) 「同書」212頁。

があり、教典があり、いろいろの儀式があり、信仰の仕方がちがっていて、同じ信仰の人が集って教会をつくり、教団を結んで、他の信仰を排斥するのが普通である。新生活倫理は、どんな人も守れば幸福になり、はづれば必ず不幸になる人の生活の仕方・心の持ち方を実行するので、どんな宗教を信じる人であろうと、どんな信仰の人であろうと必ずよらねば損する生活道である。」⁴⁰⁾

さらに、丸山は実験倫理という言葉を用い、自己の説く倫理学の従来のものとの相違を強調する。丸山は、科学と宗教の差異を論じた後に、倫理との関係を以下のように記している。「科学と宗教との二つの世界にまたがって、足は科学にしっかりとふみしめ、頭はしっかりと宗教につっこんで、毅然として立って居るもの、これが人間である。そして人間の胴体が全的に生きる世界、これが倫理・道德の世界である。」⁴¹⁾ 倫理と宗教との関係は、「宗教は倫理の上に立つ。必ずこれに立たねばならず、若し倫理に立たぬ宗教があったら、それは水底の土に根を下していない浮草のように、ふわふわと所定めぬ迷信であって、その命脈も電光朝露のごときものである。」⁴²⁾ 丸山の提唱する倫理とは、「科学に立脚して、一日も之と離れることはないが、宗教に立脚しているのではない（これは信仰・信念に無関係という意味ではない）。ただ宗教に出入して、その奇蹟的苦悩解決に契機を得て、倫理実践のスタートを切り、人生の遠き旅路を、喜びの中に進む。……そうした場合、宗教に出入すると言うても、個人の宗派的信仰を変えさせるのではなく、その信仰に突入徹底する助力をする、後押しをするのである。」⁴³⁾ 宗教の本質は、倫理を越えており、直ちに絶対に救済の手をのべ、全智全能の本質を発揮する。実験倫理は、各自のもつ宗教に根強い倫理の根拠を実践体験によって把握させ、

40) 「同書」212—213頁。

41) 丸山敏雄「実験倫理学大系」新世書房1977年、25頁。

42) 「同書」29頁。

43) 「同書」30頁。

その信仰に正しい足場をあたえる。以上、丸山は、倫理と宗教の関係について記しているが、彼は、宗教という言葉によって、いかなる内容のものを意味していたのであろうか。この点で注目されるのは、丸山は、日本においてやかましく問題とされてきた「神社は宗教であるか無いか」という問題に対し、神社は、宗教ではなく、倫理生活の中にあるとしている。⁴⁴⁾ 丸山竹秋は、父である初代所長の見解を要約して以下のように述べている。「信仰には(一)高い純粹信仰（純粹とは宗派でなく、また迷信的・邪惡的でないものを意味する）、(二)自由信仰（いわゆる 民間信仰、神社の中には、この種のものもある）、(三)宗派的信仰が考えられ、日本古代人の信仰には、(一)と(二)とがあったが、このうち、(一)のものをもっとも重要視して、これを探りあげ『倫理生活の中にある』といい『倫理の実践が高潮して、絶対界に出入する高い信仰』というのである。」⁴⁵⁾ 丸山敏雄が目ざしていた倫理運動は、日本の古代人が抱いていた高い純粹信仰と同じとされる。したがってそれは、教派神道のような意味ではないが、古代人の理想としていた生活態度・かんながらの道を、原始神道とし、神道を宗教に含めるならば、宗教であるといってさしつかえないものと思われる。

J会においても倫理と宗教の関係は、重大な問題として議論されている。しかし、そのとらえ方は、初代会長と二代目会長との間でやや異なっているように思われる。初代会長は、まず祖霊を尊びあがめることは大切であるし神は敬して尊ばなければならないとする。しかしながら、実践倫理は宗教活動ではない。それは、宗教の信仰を深めるための基盤、原則となるものであるとされる。倫理は、正しい信仰の足場を与え、信仰の理解の支柱となり信仰を深めさせる。宗教の救済は、そのまま無条件に救われるが、倫理は日常の実践ということがあり、条件つきである。倫理性を失った宗教は邪宗とな

44) 「同書」40頁。

45) 丸山竹秋「倫理と宗教」新世書房1975年、228—229頁。

り宗教は倫理（科学と宗教に出入する正しい生きかた）より出発すべきものである。釈迦もキリストも、開教開祖はみな倫理（この場合は人間のふみおこなう道理）を説いたのである。今日のように、無神論者や無宗教者が増えるのは、宗教自体が魅力をなくした故で、それは教団が倫理性を薄めたからである。

二代目会長は、倫理は、宗教よりもっと基本的なものであり、宗教より古くから人類社会に存在したものとする。宗教の倫理性なるものは、「自分がまず救われるための倫理」であり、他人を不幸にしかねないものである。これに対し、J会の説く倫理は、「社会的な倫理」つまりあらゆる人々のための倫理である。宗教は、その教義を厳格に守ることにより幸福になれるとするが、実践倫理は、人間としての正しい倫理の実践により、自分で幸福を手に入れる。実践倫理は、強い論理性と社会性をもつのに比べて、宗教は観念的であり、教条的である。人間にとっての宗教の魅力は、人間のもって生まれた弱さへの苦悩や、死への恐怖に救済と慈悲が与えられることである。実践倫理は、人間が自分により、この世を幸福にするための積極的な「実践の思想」であり、宗教は、人間が神の力にすがって救済を求める、消極的な「祈りの思想」なのである。しかし、実践倫理は、宗教に対立するものではなく、信仰を深めるための基盤となり得るものである。倫理の実践により、宗教上の疑問も自然に解かれるし、宗教が正しいか否かは、その教団が、どれだけ倫理をとり入れ、実践しているかによる。

ここで倫理に対比される宗教なるものは、多くの宗教の一部分しかカバーしていないといえる。したがって、学問的なレベルでの十分な論議の展開はなされていない。とくに二代目会長は、基本的には無神論者とみなされるので、初代会長と比較すると、宗教に対する見解は批判的な面が強いと思われる。初代会長は日本には昔から現在にいたるまで多くの宗教があったが、それによっては、日本は良い国にならなかった。その故に会長は、実践倫理を発見し、ひろめる必要性を感じたということである。たしかにJ会にしる倫

理研究所にしろ、宗教の信者をその構成員に含んでいるが、その一方では、現代社会においては、宗教より倫理が人間を救う力を有しているとの主張もよく聞かれるのである。その事の意味は、次章において、考察の対象としたいと思う。

4. J会と現代日本社会

J会は、昭和45年以降、朝起会場を2倍以上に増しており、現在徹底した布教活動により、かなり急激に増加しているようである。筆者が当論文において、J会の分析を試みたのも、単に一修養団体の実態にのみ関心があったわけではなく、J会の分析を通じて、日本人の精神構造の連続、もしくは不連続の問題、さらには日本人の宗教意識を世俗化と関連して考察するというねらいを含んでいたのである。又、J会の存在は、その会員にいかなる影響を与え、どのようなタイプの人間を析出せしめるか、さらには、日本社会に対してどのような作用をおよぼすかといった点が筆者の主たる問題関心であった。すなわち、筆者は、J会の分析を通じて、現代日本社会の動態を、把握する糸口をつかみたかったのである。結果としては、未だ研究が不十分で、J会がそもそもいかなる団体で、いかなる性格の集団であるかという、基本的な問題に対してさえ、確信を持って答える事ができないのがいつわらざる現状である。したがって、以下の見解は、ある意味で、暫定的なものである事を、最初にことわっておきたいと思う。

J会の会員は、20台後半から30台の主婦が主体である。入会の動機は、かつて新興宗教の場合「貧・病・争」が3大動機であったのに対し、人間関係の問題が主体である。特に主婦の場合は、家庭内の問題が、入会の動機の場合が多く、しゅうとめとの関係、夫との関係、さらに子供の教育上の問題のいずれかが原因となって入会するといえる。J会では、目上、目下のけじめをはっきりし、我をとり、さらに自己を変える事によって、他人を変える事を、くり返し教える。したがって、主婦は、しゅうとめや夫を、目上として

尊敬し、仕えるべきとされる。夫に対しては、朝、出勤する際には、3本指をついて、「いってらっしゃいませ」とあいさつし、帰宅に際しても、やはり3本指をついて「お帰りなさいませ」とあいさつするように教えられる。原則として、主人に反抗してはならず、無理な要求をされた場合も、それに正面きって逆わず、まず自己を変革すべきであり、その感化によって、しだいに相手の変化を待つべきであると指導される。やや特殊であるが一つケースを示したいと思う。

「現在、夫婦そろってJ会の会員である2人は、かつて結婚生活の危機を迎えた時期があった。その原因は、妻が働らく事により、かなりの収入が確保されていたため、それをいい事に、主人は毎日のように酒を飲んで、働らくとしなかった。困りはてた妻は、ある日、現在本部講師をしているN氏を訪ずれ、事情を説明した。それを聞いたN氏は、『主人を尊敬せず、責めるあなたが悪い』といて妻のみを非難したのである。ところが意外な事にそれを契機として、主人は反省し、まじめに働き始め、現在は幸福な家庭を持つに至っている。主人が言うには『あの時ほど、自分にとってこたえた事はなかった』との事であり、それ以来、主人は、N氏を生仏のように尊敬している。」

このケースは、J会の指導が成功した例と思われる。しかしあらゆる場合に、指導が成功するか否かは疑問であろう。筆者は、夫との関係が原因で入会した2人の主婦を知っているが、このケースは対照的な面を有している。一方の主婦は、主人が学校の教師で客観的になんの欠点もないにもかかわらず、自分が神経質な性格のため、かってにイライラしていたのである。もう一方は、主人が次から次と、浮気をし、愛人をつくるので、離婚する決心をしていた。その時、J会の会員に勧誘され会員となり3年間以上にわたり、活動が続けてきた。前者の場合には、前記の如き会の指導により、彼女は明るくなり、円満な家庭が短期に築かれるに至った。しかし後者の主婦は、夫の浮気がなくならないかぎり、幸福な家庭を築く事は困難と筆者には思われ

る。

J会においては、病気は、心の持ち方、もしくは行動の誤りに対する、大自然からの警告とされている。したがって、病気にかかった場合、会員が幹部会員から「ご指導」を受けると、最も多いのは、「主人を十分尊敬する事親を尊敬し、孝行する事」という指導である。子供の教育上の悩みに対しても、常に親が、心と行動の誤りを正す事が指導され、そうすれば、おのずから、子供は理想的な子に育っていくとされる。

主婦にとっては、家庭内の人間関係が入会の動機として圧倒的であるが、男性が入会する場合は、まず先に入会した妻の人格の変化によってJ会に関心を抱き、いずれかの機会に会の朝起か、リクリエーションの場に参加し、入会するというケースが大部分である。男性にとって最も関心があるのは、職場における人間関係であるため、J会は、その点に関連した指導を行なっている。職場においても、常に目上、目下を明確にし、目上を尊敬し、目下に対しては愛情をもって対するべきとされている。J会の初代会長は、銀行や会社、商店等に勤務していた経歴の持主で、その著書の中には、「上に立つ者の心得」「人を動かす」「仕事と人格」というような項目があり、より具体的には、「商売の倫理」「商売の心がまえ」「商業の本道」「農業の倫理」等の項目において、種々の示唆がなされている。そして、J会の会員は、会社内の人間関係をスムーズにするために、会の教えは、非常に参考になると述べる者が多いのである。

もちろん、J会の会員は公称でも300万であり、実際に実践に参加している会員は、せいぜい50~60万とみなされるから、国民のほんの少数部分を形成しているにすぎない。したがって会の存在をもってして、日本社会の現状や、日本人の精神構造を云云する事は、かなり危険性をともなう事はたしかである。しかしJ会のような集団が存在し、しかも現在増加しつつあるという事実は無視できないし、なんらかの示唆を与えようと言えよう。

まず、J会は、どのようなタイプの人間を育成するかという点から考察し

ように思う。簡単にいうと、自由・平等・独立を前提とし、自我の確立した個人主義的人間という、西欧近代社会の理念とされた、市民という概念からは対照的な人間がめざされていると言える。なんでも「ハイ」と受け入れ、現実を大肯定し、すべてこれでいいのだと受け入れ、自我没却をくり返し教え込む集団からは、戦後民主主義が目標とするような人間は、形成され得ないと言える。ここで重要なのは、戦後教育を受けたはずの人間が、なぜこのような性格の会員になるかという点である。その要因としては、学校での教育の理念と、実際の日本社会の行動原理とは、大きく異なっているという可能性があげられる。男女平等を教えこまれた近代女性も、企業に勤めたり、家庭の主婦となる過程において、男女平等が理念であっても現実でない事を知るに至る。その際に男女平等のスローガンそのものを、取り下げるなら、それは、J会が育成しているような人間類型に近づく事になるといえる。J会が現在増加の過程にあるという事実は、実際にJ会の教理によって、少なくとも主観的には、より幸福になれた人間が多く存在するという事を示している。しかもJ会に類似した教理は、新興宗教において多くみられるし、特に立正佼成会の日常道德レベルにおける教えは、J会のそれとほぼ同じとされる。してみれば、これらの問題は、単にJ会の会員に限定されないといえよう。そして、J会の教えを守る事により、上昇可能となったサラリーマンに対し、安丸氏の以下の指摘は、そのままあてはまる。「一般的にいえば、通俗道德的自己規律の真摯な実践は、現存の支配体制の内部でのささやかな上昇を可能にして、支配体制を下から支える役割をはたし、社会体制の非合理的なカラクリをみえにくくするものとしなければならない。むしろ通俗道德を教える思想家は、現存の支配体制をすすんできわめておめでたく讚美している場合が多い。」⁴⁶⁾

J会の教えを実践すると、主観的にはともかく客観的には、現体制を維持

46) 安丸良夫「日本の近代化と民衆思想」青木書店、1975年、72頁。

する側に立ちやすいという事実は以下の例から推測される。それは、会員の頒布の方法を書いた本において如実に示されている。それには、『腹を立てず』とありますが、公害病患者や薬品中毒事件などの被害者も、企業や国に対して腹を立ててはいけませんか。』という質問に対して、以下のような模範回答が記されている。「やはり、その場合も腹を立ててはいけません。…公害病や薬品中毒の原因を作った国や企業も、もとはといえば、わたしたち人間の集まりなのです。すると立場が変われば被害者が加害者になることだってあり得ないとは限らないのです。……わたしどもの会にも公害病で苦しんでおられた方もいらっしゃいますが、その方は、企業や国に対して腹を立てたことでは決して救われず、逆にそうした不幸な目にあったものは、自分自身の生活がまちがっていたからだと思われ、倫理実践に励まれて、今や立派に立ち直っておられます。」⁴⁷⁾

又、徳福一致の教理は、安丸氏も指摘するように、道徳的な優者が経済的社会的優者であり、経済的劣者は、道徳的にも劣者であるという虚偽意識を生ぜしめ、⁴⁸⁾ 一層、現体制を擁護する方向に作用しがちであるといえる。

ところでJ会の分析を通じて筆者が学んだ点に関して以下に記する事にする。まず、倫理研究所が理想とするのは、古代日本人の生活態度、思考様式であり、J会のそれもほぼ同様と推測してよいと思われる。これは、日本人の精神構造の古層が現在にいたるまで連続しているか否かという問題に対し一つの示唆を与えるものである⁴⁹⁾。さらにJ会においては、戦前の方が道義

47) この本は二代目会長の著書とされているが、内容から複数の会員によって書かれたものと推測される。

48) 安丸「前掲書」50頁。同様の問題は、ピューリタニズムにおいてもみられ、アメリカにおけるプァ・ホワイトに対する差別の強化という機能を果している。

49) この点に関しては、丸山真男・柳田国男の分析がある。なお、池田昭はウェーバーの理論を日本人の精神構造研究に適用する事により、注目すべき研究成果をあげつつある。氏の研究は、まさに画期的なものであるが、一方、以下の沼義昭氏の批判は、正当性をも有しているかに思われる。「ただ、現在の時点でおウェーバーの近代西欧資本主義という理念型による東洋の把握がどこまで有効かという問題が残るである

的に上であったとみなしており、「祖国の再建」というスローガンは、その証拠とみなす事ができる。筆者はそのような見解には同意しないが、日本人の精神構造は、戦後30年によっては、一部の变化にもかかわらず、その中核的部分は、依然として変化せず連続してきていると考えざるを得ないのである。しかしJ会の教理は、戦後の変化に対応するどころか、むしろ時代に逆向いている面の方が多いと思われる⁵⁰⁾。したがって、J会は現在増加の過程にあるが、教理に柔軟性を持せないと、いずれ限界につき当たると予測されるのである。

それでは、より宗教意識の面に限定しつつ考察を続ける事にする。J会が宗教にあらずして倫理団体と主張する事の意味は、いくつかあると思われる。まず、きわめて、プラグマティックな視点からすれば、J会は、創価学会や天理教等の代表的新興宗教団体に比較しても後発集団であったわけである。したがってJ会が、ふつうの宗教団体であったなら現在の規模まで発展する事さえ不可能であったと推測される。宗教でないと主張する事により、宗教に拒否反応を示す者でも入会させる事が可能であるし、それどころか、他の宗教の信者さえも入会させる事もできるわけである。それに、戦後の混乱期と異なり、現在においては経済水準も上昇し、医療施設も発達してきている。「衣食足りて礼節を知る」ということわざがあるが、J会に限らず、どの新興宗教団体においても、信者に対する救済目標は、人間関係に比重が移行し

う。毛沢東のウェーバー的解釈を行なっただけで、すむことではなからうと思う。またアジアの諸国が、すべて一度でも禁欲的プロテスタンティズムに改宗してみなければ、近代西欧資本主義的合理性を実現しえず、それ故にまた、お叱りを受けつづけねばならぬものなのかどうか、アジア人員の一員として、筆者は思いあぐねているのである。」(社会学評論109—88頁)

- 50) この点PL教団は、ひとのみち教団の教理を、時代に対応して変化させており、現在に至るまで大教団の地位を保っている。これに対し当会は、最近においては大家族主義の復興をも、となえており、社会構造の変化に対する認識が足りないようにみられる。

てきている⁵¹⁾。したがって、J会の教理は、まさしくこのような時代に対応する側面を有しているといえる。さらに現代は、世俗化の時代であると言われる。多くの反論はあるものの、筆者は世俗化は、現代社会の否定すべからざるすう勢であるとみなしている。そしてこれも限定つきではあるが、日本は、社会主義以外の国の中では、最も世俗化が進んだ国の一つといえよう。このような現代日本においては、J会のような集団は、発展し得る要素を多く含んでいるように筆者には、思われるのである。「神殺しの時代」という事が言われるが、そもそも日本の神は、殺しやすい神であったといえよう。してみれば、J会のような、宗教でない事をたてまえとする集団は、これから増大しうる可能性を秘めているように思われる。さらにJ会が持つ社会的、政治的役割は、かなり重要と思われる。文部省の意図する教育は、教員の反対により実施されないできているが、社団法人の教育活動は、そのような組織的反抗を受けないですむわけである。しかも宗教団体ではないから、政教分離の原則に抵触する危険性も少いといえる。したがってJ会の存在も、戦後の道德教育の歴史との関連において考察する必要があると思われる。以上、いろいろ研究し残した課題が多いが、それは又の機会に追求する事にして、当論文は一まずこれをもって終る。

後記

当論文において、研究対象の修養団体の固有名詞を記さなかったのは、当団体が、かなり閉鎖的な側面を有しているため、研究に協力してくれた人々に万一不快感を与える事を恐れたが故である。又、かなり批判的な事を書いたが、もし筆者が当団体に対して否定的な見解しかもっていなかったなら、1年以上にもわたって研究に従事する事はなかったと思われる。又、いずれかの機会をみて、当団体に対する理解度が進んだ時に、より積極的な姿勢での論考を試みたいと思っている。

51) 森岡清美の言による。